

## 日・カナダ、首脳会談で政府間 LNG 協力推進を確認

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所  
常務理事 首席研究員  
小山 堅

9 月 24 日、安倍首相がカナダのハーパー首相と会談、共同記者会見において、両国の LNG 協力推進についての合意が発表された。今後の具体的な協力推進のため、閣僚級協議を実施していくことも表明された。

詳細は今後の議論を待つことになるが、豊富なエネルギー資源を有するカナダとエネルギー輸入の低廉かつ安定的な確保を目指す日本の間で相互補完的な協力が進むことの意義は大きい。今後の政府間の、そしてそれを引き継ぐ形での実際の市場プレイヤー（企業）間の、着実に建設的な議論を期待したい。

日本・カナダ間の LNG 協力の、日本にとっての意義は何か。第 1 には供給源の多様化である。震災後、LNG 輸入量が大幅に拡大し、今後も LNG が日本のエネルギーポートフォリオにおいて重要な役割を果たしていくことが必至なだけに、供給源多様化を通じた安定調達確保は重要である。その意味で、カナダが「新規供給国」として加わることは、リスク分散の意味でも、他の輸入相手先（輸出国）との交渉力強化においても、有意義である。

第 2 に、カナダからの LNG 調達そのものが持ちうる固有の利点が期待できる。カナダに先駆ける形で対日輸出が決定している米国からの LNG 輸出も上述した「供給源多様化・新規供給源確保」という重要な意味を持つ。しかし、米国からの LNG 輸出と対比すると、カナダからの輸出は、①輸出が西海岸から行われる公算で、東海岸・メキシコ湾岸からパナマ運河を経由して輸送される米国 LNG より輸送距離が短い、②パナマ運河を経由する必要がなく、通行料およびタンカー船型（サイズ）当の面でのハードルが低い、等の特徴を持つ。要するに、LNG 輸送に関連するコストが低く、より短期間で日本に到着する、というメリットが期待できるのである。また、後述するカナダ側にとっての意義と裏返しの関係になるが、カナダにとって日本（アジア）市場が新規市場開拓ニーズ等の面で重要であり、日本は「求められる存在」であるということも大事であろう。

なお、「輸送コストが低く済む」ということと、「安い価格で調達できる」ということは必ずしも同義ではない。輸送コストが低いことは「有利な一条件」であるが、最終的に、調達価格を決定するのは全体としての調達に関わる契約条件であり、具体的にはどのよう

な内容の価格決定方式・フォーミュラが採用されるか、ということに尽きる。その意味では、期待値は高いものの、今後の議論の進展、とりわけ、実際の LNG 取引に関する売手・買手間の交渉が待たれることになる。それでも、上述した第 1 のメリットは意義があり、多様化・新規供給源の確保を通して、日本の LNG の需給環境・調達環境が好ましい方向に動くことは期待できる。とりわけ、今後の他の LNG 供給者との交渉・議論を考える上では大きな意味を持つとあってよいだろう。

他方、カナダにとっての意義は何か。これは、資源輸出国として、供給先の多様化と新規販路の開拓・確保に他ならない。これ自体は資源輸出国にとって普遍的な意義を持つものであるが、カナダがおかれている現状が多様化と新規市場開拓の「価値」を大きく拡大しているのである。

カナダは在来型および非在来型のガス（及び石油）資源を豊富に持つ国である。カナダ経済にとっても、資源輸出の重みは大きい。問題は、カナダのガス（及び石油）輸出が、基本的にアメリカ市場依存型となっていることであり、その重要販路としての米国でシェール革命が進行していることがある。シェール革命進行で、米国のガス価格は大幅に下落した。この環境下で、カナダからのガス輸出は米国内の需給緩和の影響を受けざるを得ず、輸出の経済性・輸出利益は大幅に低下している。加えて、豊富な資源を開発し、さらに輸出拡大を狙っても、追加的販路確保は到底おぼつかない状況にある。まさに、その時、経済成長やクリーンエネルギーへの需要の高まりでアジアの LNG 市場が大きく拡大する将来像がカナダの眼前に広がっている状況にある。また、震災後、原子力発電低下で LNG 需要が大幅増加となった世界最大の LNG 輸入国、日本の存在もある。カナダにとっては、米国市場依存から多様化を図り、成長市場に参入する大きな機会として、今回の LNG 協力を重視する背景が現実存在しているのである。

先に述べた通り、今回の両国の合意は、政府間での議論を深めていくことの合意であり、実現に向けた詳細はこれからである。今後様々な紆余曲折はあろうが、それでも、両国にとっての意義を踏まえ、相互補完・Win-Win 関係を実現するための議論の大きな一歩となることが期待されよう。

なお、カナダにとっての意義を論じた部分にあるが、資源輸出国にとって、現在特定の輸出市場・販路に大きく依存し、その依存先に様々な問題が発生する場合、多様化と新規市場獲得は真剣な、喫緊の課題となる。その例は、カナダに限らないことにも留意する必要がある。具体的には、欧州市場依存から脱却し、アジア市場開拓を目指すロシア、そして同じく北米では、本土 48 州依存からの多様化を図るアラスカなどがある。カナダ、ロシア、アラスカそれぞれに個別状況にはいずれも様々な課題があるものの、わが国としては相手側実情を踏まえた戦略・交渉を、官・民の適切な役割分担の下で進める必要がある。

以上